

第十五話

大地震彗星事付聞鶏事

『前太平記』上 卷第三 四十九頁から五十頁より

【兵乱の予兆】

承平七年四月十五日、大地が再び激しく震動して、四月二十九日まで、昼夜全く止まる時がない。毎年このような大地震が何度も発生することは、普通ではないと思って、色々な人が疑念を抱かないということはない。これだけではなく、彗星が毎晩流れてきて、その光は月よりもさらに明るい。天文博士を内裏へお招きになって、吉凶を占わせられる。そこで、お考え申し上げたことは、「我が国に彗星が現れたことは、皇極天皇の御代に蘇我入鹿の謀叛の時で、初めてこの星が現れた時から、今に至るまで、一度も吉兆であることはない。そもそも、彗星には五つの種類

祥瑞なることなし。

がある。その色が青いときは、王や諸侯が乱れて、天子は戦乱に悩み、赤いときは凶賊が出現して民草たちは安心できない。黄色いときは、女性が問題を起こす。白いときは将軍が謀叛を働いて、二年のうちに戦乱が大きく起こる。黒いときは水の精霊で、洪水が江河にあふれ、五穀が実らない。とりわけ、今回の彗星はその色が

白い。おそらくは、二年を立たぬうちに、将軍が天子の命に背いて、兵乱が大きく起こり、国が衰え、民が苦しむはずでございます。非常に重いご用心を」と申し上げた。

そして、その頃、都で闘鶏を興じ、楽しむことがしきりに行われて、老い若きすべてがこれに夢中になった。過ぎ去った三月四日に内裏十番勝負の闘鶏があったので、七八九歳の子供たちが見て真似をしていて、時々これを蹴り合わせたが、次第

時々是を蹴合わせしが、

に事態は騒がしくなって、家々で五十羽三十羽ずつ、ひどく多く飼って、四本柱を

次第に事夥しく成って、

立て、土俵をそろえて、相撲の場のように設けて、毎日鶏を捕まえる。それゆえ、

相撲場の如くに補理いて、

自分は他人に負けまいと蹴爪が太くたくましい鶏を求めたくらいで、金銀（私財）を費やし、仕事を忘れ、ある者はこれを手に入れることが出来なくて、他人の鶏を盗み取り、しまいには口論や喧嘩に発展する。この時、田んぼ一反をもって、一羽の鶏に交換した。すでに事情は帝の耳まで届き、摂政が仰ったことは、「伝え聞く唐の王勃は幼くして優れた才能があり、文章が優れていた。高宗がお招きして、博

「伝へ聞く唐の王勃、幼にして逸才有り、

文辞善くす。

士とする。寵愛は大変重いものだった。この時、諸王は鬪鶏を楽しんでいた。王勃は沛王のために、戯れに文を作って、優れた王の鶏を言い聞かせる文を発する。

王勃は沛王の為に 戯れに文を作って、 英王の鶏を檄す。

高宗は怒って言うことには、『是且交構の漸なり^(巻)』と言って、ついに王勃は地位からどけられ、劍南に食客となったのだった。今、鬪鶏を好む者を罰するならば、

劍南に客たりき。

京の民草は一人も逃れることはない」と言って、すぐに厳しく告げ知らせて、この催しをお止めになり、鶏を全て山々にお放しになった。

諸卿はもう一度評議を行って、「天地の妖はすでに発生し、今また多くの人が珍

「天地妖既に顕はれ、 今又諸人奇物を愛す。

しい物を好む。この三つの災い（地震・彗星・鬪鶏）をお取り去りになるには、年号を改元するのがよい」と言って、承平を廃止になさって、天慶に移されたのだった。

注釈

※老・是且交構の漸なり……詳細不明。裏切りの濡れ衣を被されたことと思われる。

今回の彗星に関する記載は素直に「へえ」と感じました。大決戦が始まるような引きがゾクゾクします。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2015/6/9

改訂：2021/3
海熊童子